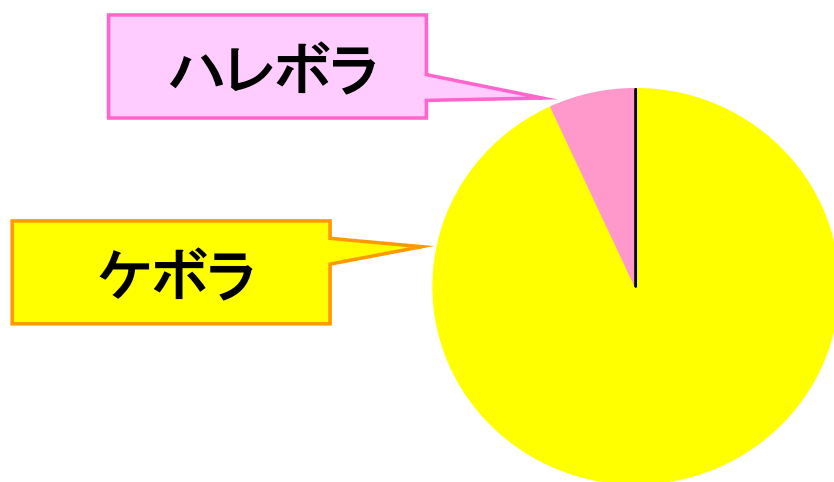


銭形平次は ボランティアだった

住民流ボランティア入門

「いわゆる「ボランティア」は人口の7パーセント。残りの93パーセントは何もしていないのか？そうではない。従来のボランティアは「ハレボラ」、93パーセントは「ケボラ」をしていたのだ！



住民流福祉総合研究所 (木原孝久)

350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

はしがき

サブタイトルに「住民流『ボランティア』入門」とあるように、本書は住民の流儀にもとづいたボランティアとはどんなものかを解説したもので、読者の皆さんが今まで考えてきたようなボランティアとは異なった発想が提示されています。「ボランティア」からNPOへ鞍替えした人が言っていました。「NPOになって自由になった」と。「ボランティア」にはいろいろな縛りがあって、自由な行動がしにくいというのです。「ボランティアはこうあるべき」と、推進者がこの言葉にさまざまな要件を貼り付けた結果、ボランティアの裾野が広がりにくくなっていただけです。

必要なのは、誰もが足元で、社会や人のためにできることをすることです。それを後押しする「ボランティア」の考え方をくり上げる必要があるのです。といっても新たに「くり上げる」必要はありません。住民が既に実践しています。それらを「ボランティア」と認めていなかっただけのことです。

「ボランティア」という言葉がたくさんの人によって使われると、この言葉に貼りつけられていた様々な要件が剥ぎ取られて、ただの「活動」という、元の単純な意味に戻っていきます。「有償ボランティア」という言葉はおかしいではないかという関係者がいました。無償であるはずのボランティアを有償でやるとはどういうことなのか。どうということはありません。「有償」の「活動」なのですから。「ボランティア」は無償たるべしなどと決めてかかるから、おかしく見えるのです。

住民流のボランティアを本書では「ケボラ」と表現しました。従来の「ハレボラ」とどう違うのかを示しながら、ケボラのすごさを知っていただきたいと思います。

<目次>

第1章 「ハレボラ」と「ケボラ」／3

第2章 「ケボラ」の十の利点／20

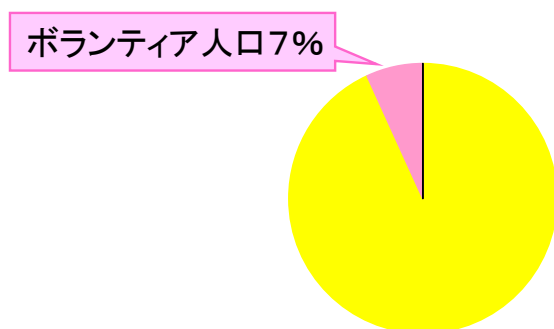
第3章 「ケボラ」こそ「新しい公共」／33

第1章

「ハレボラ」と「ケボラ」

1.「ボランティア人口7%」の裏にあるもの

いま日本にボランティアはどのくらいいるのか。ボランティア推進機関に聞いてみたら、人口のおよそ7%という数字が出てきました。アメリカで同じ調査をすると、ほぼ「人口の半分」と出ます。両国の「ボランティア」精神の育ちには、ある程度の差があるにしてもあまりに違いがあります。もしかして「ボランティア」の捉え方の違いではないのか？



●「残りの93%」はボランティアをしていないのか？

問題は、残りの93%の人です。彼らは本当に「ボランティア」をしていないのか？「ボランティア」とは言わないけれど、「それらしき」ことはしているのではないか。

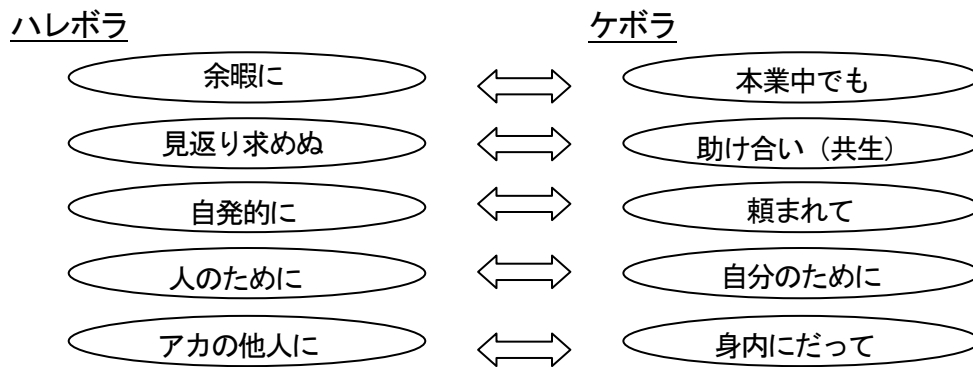
では、「ボランティア」と「ボランティアらしき」活動の違いは何か。日本人にとって「ボランティア」は、余暇に自分の意志で、グループに入って活動することでしょう。しかし人によっては、そんなあり方は好まないかもしれません。普段の生活の中で、たまたま出会った人にさりげなくやってあげる——日本人はそんなあり方を好んでいるのです。

●非日常的な営みをハレボラ、日常の中での行為をケボラ

「ハレ」と「ケ」という言葉があります。「晴れ着」とは、「ハレの日」、結婚式とか成人式といった非日常的な場で着る服です。反対に、日常生活の場を「ケ」。「人口の7%」は「ハレ・ボラ」、残りの93%は「ケ・ボラ」と見たらどうでしょう。

2.ハレボラとケボラはこれだけ違う

「ハレボラ」と「ケボラ」のあり方は、ほとんどすべての面で正反対、というぐらいに異なっています。まず5項目を並べてみましょう。



(1)本業中にこそ活動のチャンスが

「ハレボラ」はあくまで「余暇活動」として取り組まれるものと考えられています。本業の中でやれば、ビジネス活動と紛らわしくなって、「無償の行為」という大事な意義が薄れてしまうと、ボランティア推進者は警戒します。しかし、「ケボラ」はまさにその「本業中に」行われていることです。一見そうは見えない顧客サービスの中に紛れ込んでいるのです。営業活動とボランティア活動がごちゃ混ぜになっていますから、「ハレボラ」派には認め難いところでしょう。

しかし、その本業中だからこそ、活動テーマが近づいてくるのだし、そこでは本業で発揮されている「技術」が生かされる、という意味では、よほど力強い活動が

期待されるのです。

● 銭形平次はボランティアだった！

昔、テレビで「銭形平次」という番組がありました。主演は大川橋蔵。私の父がこれを好んで見ていました。どんなに仕事が忙しくても、水曜日の午後8時だけは、必ず帰宅してテレビの前に座るのです。この番組の何がいいのか知りたくて、一度、じっくりと付き合ってみました。

コマーシャルを除けば約45分間程度でしょう。その前半の15分で早くも、下手人らしき者が登場、30分頃にはやはりその者が下手人であることが判明します。これで下手人が捕まったのですから、残りの15分は何をするためにあるのか。じつは、ここで平次は「ボランティア」をしていたのです。捕らえた下手人の妻子の面倒を見るとか。なるほど、私の父親はこの「ボランティア」活動の部分を楽しんで見ていたのです。

おもしろいことに、平次の上司である奉行所の役人は、彼に向かってグチるのです。「お前は悪人を捕らえて俺のところに連れて来ればそれでいいのに、すぐ余計なことをする」と。なるほど、刑事は悪人を捕らえるだけでいいのであって、その延長線上に待ち構えているボランティア・チャンスには目をつむればいいというのが普通です。しかし平次はあえてこれに取り組んでしまう。

なるほど、日本人はこういう「本業の中での活動」の方が体質に合っているのかもしれないなと思ったものです。

● 「粹なはからい」これぞ公務員の本業ボランティア

病院のソーシャルワーカーをしている知人から、ユニークなボランティアの話がある、と連絡が入りました。彼女の病院に検査に来た中年の女性が、末期ガンと宣告され、「それなら病院に居ても仕方がない」と家へ帰ってしまったのですが、自宅療養といっても、障害者手帳もない彼女は電動ベッドや車イスは貸してもらえない。入浴サービスも受けられない。介護保険の手続きを待っているうちに寿命は尽きてしまう。そこでワーカーの彼女は、その患者の地元の福祉課に「なんとかならないか」と頼み込みました。

すると驚くべし、担当課員は患者の要望をことごとく受け入れてしまったのです。おかしいと思って、私は電話してみました。「一体、どうやって不可能を可能にしたのか?」。彼は開口一番こう言い放ったのです。「そういう頼み事を受け入れるかどうかは、こちらの胸三寸なのですよ」。つまり、こっちが「やってやろう」と思えば実現するものなのだ。それにしても、そうしたサービスを提供するには「条件」というものがあるはずだ。

「条件の最後にこうあるのです。『その他、市長がよしと認めたこと』、これを使えばいいのです」。こういうのを粹なはからいと言うのでしょう。杓子定規に受け止めればノーなのを、なんとかこじつけてオーケーにしてしまう。公務員の本業ボランティアもあるのだと、そのとき思ったものです。

●本業中に「レジボラ」?

あるOLの新聞投書。いつものように帰宅途中にスーパーに立ち寄った。かごの中に品物を入れ、いちばん短い列のレジに並んだが、前が滞っていちばん長くなってしまった。それでも我慢してその列に並んでいたら、その「いちばん長い列」の私の後に老婦人が並んだので振り返ったら、彼女が言い出した。「この列のレジの方が親切でね、私がレジを通ると必ずひと声かけてくれるんです」。

興味を持ったOL、自分の用が済んだ後、老婦人の時にどうなるかを見守っていたら、なるほどレジのスタッフが「おばあちゃん、顔色がいいじゃありませんか?」などと声をかけている。その老婦人、「私はこのひと声を聞くために、毎日この列に並びに来るんですよ」と、うれしそうに話した。本業の最中でも、(活動を)している人はいるものなのです。

(2)儲けようと思って何が悪い?

「ボランティア」は見返りを求めてやるものではありません。しかし本業の中で、「あわよくば企業利益につながったら」と思うことがそんなにいけないことなのか。地域社会の原理は「助け合い」。お互いが利益を与え合うことで社会は成り立っているのです。「利益を度外視して」というのはやはり不自然です。

「見返りを求めない」と言えば聞こえはいいのですが、例えばボランティアの助け

を得ている要援護者からすれば、(ボランティアに)「お返しができない」というのは大変な苦痛です。なんらかの形でお返しができればこそ、相手の善意を快く受けられる。人間の心には「プライド」というものがあることを忘れてはなりません。地域社会のルールは、あくまで「助け合い」であって、そのルールは相手が要介護5の人であろうと適用されるべきものなのです。



託児コーナーを設けたり、月刊誌を発行するなど、様々な顧客サービスを提供して地域のママたちに喜ばれている子ども服リサイクル店。企業には「儲けたい」という強い動機があるからこそ、良い活動が生まれる。

(3)自発性は活動の「前提」ではなく「成果」

ボランティアといえば自発性。「誰かから強制されてやるものではない」ことは正しいとして、しかしこれをことさら強調することにどれほどの意味があるのか。

強制されて活動を始めたが、そのことで活動に目覚め、以降は自発的にやるようになったという事例が多くあります。そう、「自発性」は活動の前提条件にすべきではないのです。活動の結果芽生えてくれば、それでもいいのです。

●授業中に学生にゴミ拾いをさせてみたら…

大学生(150人程度)に「福祉」や「ボランティア」を講じていたときのこと。彼らに「どんな条件が整ったらボランティアをするか?」と問うたら、「異性とデートできるなら」、「単位をくれるなら」、「少しお金をくれるなら」、「授業中にやるのなら」。

では、試しに授業中にやってみようという提案。1時間、キャンパス内でゴミ拾いをさせた後、感想文を書いてもらったら、「ボクは今日、生まれて初めて道に落ちているゴミを拾いました。正直なところ、こんなにすがすがしい気持ちになったのは

初めてです」と皆、感動していた。

それから数ヵ月後、大学事務所に顔を出したら、職員にこう声をかけられた。「この頃、学生が登下校中にゴミを拾っているんですが、もしかして先生の影響ですか？」。

(4)「自分のため」から入って、やがて「おすそわけ」へ

ボランティアは他人のためにするものですが、だからと言って、必ずしも初めから「他人のため」である必要はないでしょう。「自分のため」から入って、やがて「他人のため」に発展していく…でもいいではありませんか。

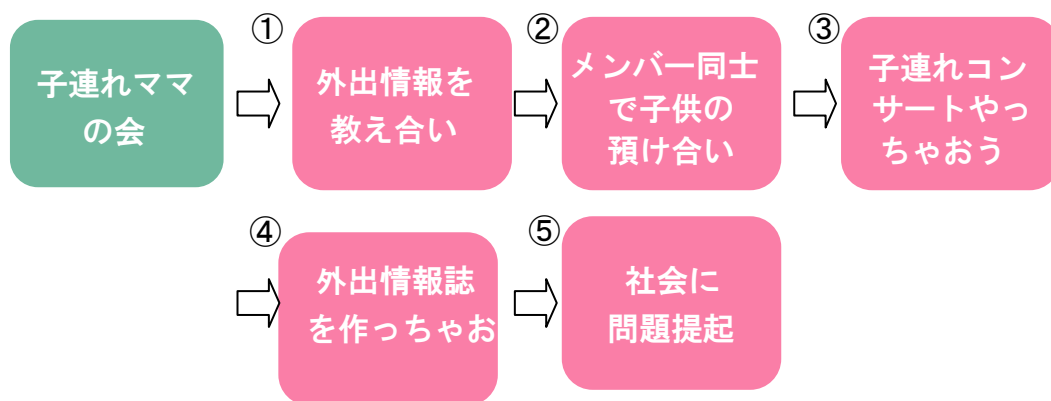
じつは今大流行しているのが、このパターンの活動です。自分と同じ問題を抱えた人とグループを作り、そこで助け合い、やがて地域で同じような問題を抱えた人たちへ支援の手を差し伸べるようになる…これを「おすそわけ」と言ったらどうでしょうか。この種のグループ活動を見ると、その大部分が「おすそわけ」活動に発展しているのです。

●「子連れコンサート」に「子連れ外出情報誌づくり」

次のフローチャートをご覧ください。「子連れママの会」の一般的な活動発展のパターンです。まず仲間内で外出情報を提供し合う。「今日美容院に行くんだけど、託児をしてくれる店はない？」「私が通っている美容院はやってくれるわよ」といったふうに。

次いで、メンバー同士で子どもの預け合いをする。10人でやれば1人あたり10日に一回ノルマが訪れる。その日は仲間の9人の子をわが家で預かる。その代わりに、残りの9日間は自由になります。

次は「コンサートへ行こうよ!」。しかし子連れでは断られる。ならば自分たちで開いちゃおうよと「子連れコンサート」。地域の他の子連れママたちも招待します。その後、「子連れ外出情報誌」づくりにも取り組み、自分たちで解決できない課題は社会に問題提起していくことも。これらの活動も地域のママたちのためです。というようにして、「自分のため」から出発したグループなのに、その活動内容をよく見てみると、多くが「おすそわけ」だったのです。



(5) 「身内」に対してだって「ボランティア」

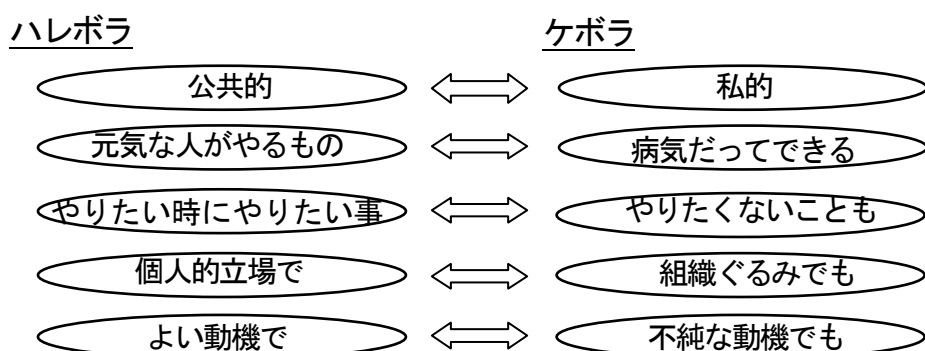
ボランティアは、「アカの他人」に対してするもので、「身内」に対してするものとは違うと、誰もが考えているようですが、これも見方を変えてみましょう。何十年間も寝たきりの姑の介護を続けてきた主婦が、「(介護に忙しくて) なかなかボランティアができない」と悩み続けていると聞いて、奇妙な感じがしたものです。

地域でボランティア活動をしている主婦が、「夫の自立教育」に関心を持たないのも、「身内にやってもボランティアにならない」と思っているからでしょう。

● 「夫ボランティア」？

広島県内の某病院。一人の高齢の入院患者（女性）のもとに、毎日午後三時になると老紳士が見舞いに訪れる。右手に花束、左手にステッキ、グレーのスーツできめている。女性患者が「いつも遠いところからすみません」と謝ると、老紳士、「ワシはアンタに会いたいから来るんじゃ」とニコニコ顔で答える。

興味を持った患者が看護師に聞いてみた。「あの男の方、誰なの?」「あの患者さんのご主人ですよ」「へえー、感心な旦那さんね」。その患者、もう一つ気になることが出てきた。「ねえ看護師さん、奥さんが『いつも遠いところすみません』って謝っているけど、旦那さん、広島のどのあたりから（見舞いに）来ているの?」。看護師、急にヒソヒソ声になって「じつはあのご主人、この病院に入院しているんですよ。奥さんには内緒ですけどね」。これにはビックリ。



毎日午後3時になると背広に着替えてエレベーターで降りて1階の花屋で花を買い、病室の妻を見舞っていたのです。そしてまた自分の病棟に戻って、寝巻きに着替える。何のためにこんな面倒なことをしているのか？これはただ「妻を見舞う」というよりは、1人の女性を励ますための友愛訪問と考えた方がいいかもしれません。彼にとっては立派な「社会的」行為ということになります。

そう言えば「他人行儀」という言葉があります。身内によそよそしい態度をとる、というふうにも受け取れますが、逆に親しい仲でも、人間対人間として相手の人格を尊重し合う姿勢が必要という意味でもあるのです。

● 「私的」行為にも「社会的」意義あり

ボランティアは「公共的」「社会的」な営みだということですが、「夫ボランティア」のように、本来「私的」な行為でも「社会的」意義を持った活動がたくさんあるのです。

それぞれのご近所で、世話焼きさんが足元の要援護者の面倒を見ているのですが、それらはことごとくと言っていいほど「私的」な行為で、ほとんど「お付き合い」の中に活動が紛れ込んでしまっています。しかし、それらが「社会的」に意味を持った営みであることに違いはないのです。

ボランティアセンターで講座に参加し、活動グループを作り、コーディネーターの指示で社会福祉施設へ行けば、まぎれもなく「社会的」活動なのでしょうが、その種の活動は日本人の活動の中では、ほんの一握りというべきです。

(6)要介護度が上がるほど「ボランティアをしたい」

奇妙なことですが、私たちは「ボランティア」は、元気な人が「弱った人」(?)にやってあげること、と単純に思い込んでいます。

しかし実は、人間は(ボランティアを)「される一方」の立場には耐えられないものなのです。誰にでも「心の貸借対照表」があって、人から助けられると「負債」が増える。その分、プライドがつぶれる。要介護度が上がるほど負債が増え、プライドの危機になっていく。だから、要介護度の高い人ほど「ボランティア」をして、「資本」を少しでも増やしたいと思っているのです。

●認知症で寝たきりの稲葉さんが「学習モデルボランティア」

下の写真をご覧ください。中心にいるのはさいたま市の稲葉敏夫さん。要介護5で寝たきり、認知症でもあります。彼は何をしているのか。周りにいるのは埼玉大学の学生です(右から2人目が担当の大塚准教授)。彼はこの学生たちの学習のためのボランティアをしているのです。入浴介助の仕方などをビデオ撮影するのにも協力しています。要介護5でもボランティアができる!彼のこの喜びがどれほどのものか、想像できるでしょうか。

母が認知症になり、デイサービスに通わせている娘が、母のプライドをつぶさないように、デイサービスセンターと協議の上、他の高齢者のお世話をするためにデイサービスへ行くのだと、母に思わせることにする。そんな事例がよく見受けられます。だから要介護度の高い人



にほど、ボランティア活動のチャンスを提供する、これが基本的なルールだと考えていいでしょう。

先程の稲葉さんは、その後亡くなったのですが、娘さん(写真・父の後方)は葬儀のとき、この「ボランティア活動中の父」の写真を遺影として使ったそうです。

(7)日常生活の場ではやりたくないことでもやってしまう

ボランティアは本人の自発的意志で取り組むべき、というだけでなく、自分のや

りたい時にやりたい活動をするものと思われがちです。

いわゆるボランティアと呼ばれる人の多くは、この発想で行動している一方で、その他の「ケボラ」に該当する（国民の大部分の）人たちは、別にやりたくない時でも、またやりたくないことでも、実行に移しています。というのは、「ケボラ」は普段の日常生活や本業の場で、たまたまそこに近づいてきた「困り事」にその場で対応するのが普通ですから、しぜん「やりたいこと」でも「やりたい時」でもないけど、やってしまうのです。

●「迷惑な客」の面倒な要求をことごとく受け止める

以前、京都市内をフィールドワークしていたとき、たまたま「東寺」という駅を通りかかりました。駅前に「コトブキ」というケーキ屋さんがあり、そこでケーキを買おうと財布を開けたら1万円札しかなかったので、それを差し出しおつりを待っていました。ふとレジの脇を見ると、なにか注意書きが立てかけてある。そこにはこう記してありました。「お買いにならなくても、ご遠慮なく両替をお申しつけ下さい」。



駅前店は両替を頼まれたり、道を聞かれたりするという宿命を負っています。そのとき「お買いにならない方は、（両替は）ご遠慮下さい」と記すものですが、この店はその反対の対応をしているのです。

よく見ると、その注意書きの脇にチラシが積んである。よく聞かれる店などの場所が書かれた、手作りの地図を置いているのです。その他にも壁を見ると、「荷物を預かって差し上げます」と。近くの東寺にコインロッカーがないらしく、お客の一人に頼まれて以降、この紙を貼ったのだと。その脇に「傘を貸してあげます」とも。要するに、このような面倒な頼み事をしてくる客の、「面倒な要求」にことごとく応えていたのです。

(8)会社と社員が一体で「相乗りボランティア」

本業中だと、「個人のボランティア」というよりは「企業の社会貢献活動」になってしまうのではないかと思います。両者をことさら区分けする必要などない

のではないか。それを「相乗り活動」と言ってみたらどうでしょう。

●拡大写本作りにわが社のカラー複写機を無償で

カラー複写機の製造販売をしている富士ゼロックス社（写真下）。その営業マンのS氏は、たまたま妻のやっているボランティア活動に興味を持った。「拡大写本」ボランティアグループ。弱視児童のために、教科書の文字を拡大したものをグループメンバーで手分けして作る活動だ。

それで何が大変なのかと聞くと、写真やイラストなどが難しいと。「オレの会社の商品なら、きれいにできるぞ」と言うと、「じゃ、それお願い!」。営業所長に話を持ち込んだら、S氏の妻の活動に限って無償で使用してもいい、ということになった。



ところがその後、妻たちは全国拡大写本ボランティア大会で作品を公開し、「富士ゼロックス社の協力でできた」と言ってしまった。参加グループは地元へ戻って、足元の同社に「私たちにも使わせて!」。当惑した支社から本社に問い合わせが殺到。結局、S氏の働きかけが功を奏して、正式に同社の「社会貢献」活動となったのです。

ちなみに、全国でよく知られた企業の社会貢献活動その発端までさかのぼってみると、多くが特定の社員から始まっていることに気付きます。社員がまず個人的に取り組み、その後、会社がこれに便乗したとか。

(9)必要なのは「良い動機」より「強い動機」だ

ボランティアやその推進者は、どういうわけか活動の動機を非常に大切にしています。どんなに素晴らしい行為でも、動機が良くなければ価値がない、とさえ言われます。だから企業が社会貢献を始めると、その動機に厳しい目を向けます。「儲けようと思っていないか」チェックしようとするのです。

しかし考えてみて下さい。「悪い動機」だからその結果「悪い活動」になるでしょうか。私たちは人間の心を単純に見すぎているのです。不純な動機から良い活動

が生まれてくるあたりに、人間というものの素晴らしさがあるのではないのでしょうか。

実際には、「良い動機」であれば「良い活動」になるということはありません。活動に踏み切るには、それだけのエネルギーが必要です。そのエネルギーはむしろ、「儲けたい」といった「不純な」(?) 動機から生まれる場合が少なくないのです。そう、今求められているのは活動のための「良い動機」ではなく「強い動機」なのです。

●銃社会に息子を奪われた服部さんの心の内は…

人は、どういう状況に置かれたら「社会的行動」に目覚めるのか。「社会の矛盾」に直面し、その矛盾を解決していかねばと発奮し、実際に行動を起こすには、よほどの「きっかけ」が必要です。

中高年男性は、なかなかボランティア活動に参加しないと言われますが、それでも社会の目を引くような、目覚しい活動をしている中高年男性と言えば、思い浮かぶのは…。

例えば、息子さんがアメリカで射殺された服部さん夫婦。今では、アメリカ人から銃を取り上げようという壮大な目標にチャレンジしています。またアジアで息子さんが同じような運命を辿った中田さんの父親もまた、NGOの活動で有名になりました。

服部さんや中田さんの「活動」の動機は何なのか。勝手に人の心を推測するのは恐縮ですが、もし私が服部さんの父親と同じ立場に立たされたら、あれほど安易に銃を使用した犯人や、それを許しているアメリカ社会に対する怨念に近い憤りが、おそらく何年経っても日々、沸き起こってくるだろうと思います。そして、それこそが私に「ボランティア活動」を続けさせるはずだ、と。

このように、中高年の男性の場合、「被害者」の立場になって初めてある社会問題への怒りが猛然と湧き起こり、「ボランティア」へ身を投じるようになる、そんなケースが目立ちます。人間が「ボランティア」へ目覚めるきっかけや動機がどんなものであろうと、活動の成果に変わりはないのです。

(10)手足を動かさなければ、「心の活動」がある

今まで述べた他にも、私たちはいつの間にか「ボランティア」にさまざまな「要件」を貼り付けてしまいました。「手足を動かして」というのもその一つです。ボランティアというのは、物理的・身体的な活動のことなのだ。

こういう条件を付けられてしまうと、病気だったり要介護状態だったりすると、できることはなくなります。年を取れば、それだけ活動の領域は限られることになります。でも現実には、そんなことはあり得ません。「心の活動」という無限の領域が開けているのです。

●「今日、あなたのために一日祈ってあげる」

「地域通貨」というのがあります。特定の地区だけに流通する貨幣のことです。これで「小さな善意」をやりとりすることで、日本人の中に眠っているボランティアの心、助け合いの心を掘り起こそうというものです。ところが、この地域通貨が期待されたほどには流通していないと聞きます。

例えば、若者は高齢者にいくらでもやってあげられるのですが、その逆のケースがなかなか生まれません。若者も「(高齢者に) やってもらえないことがない」と言ってしまう。ところが、アメリカではちょっと事情が違っていました。向こうでは「タイム・ダラー」(時間のドル) と言うのですが、ここでは「高齢者が若者のためにやってあげる」というケースがあるのだそうです。具体的にはどういうことなのか。「あなたにはいろいろやってもらっているから、今度は私があなたにやってあげる」と高齢者。そこで何をしようというのか。「今日、あなたのために一日祈ってあげる」と。日本人なら「そんなことしてもらっても…」と思うかもしれませんが、アメリカ人は違うのです。「今日はなんだか気分がいいわ、ありがとう！」と言うのです。「心の活動」を社会が認めている—その土壌があればこそ、「ボランティア」の広がりがあるのだらうと感じました。

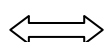
ハレボラ

手足を動かして

自ら手を下して

最前線で

特技を生かして



ケボラ

心の活動でも

人にやらせるのでも

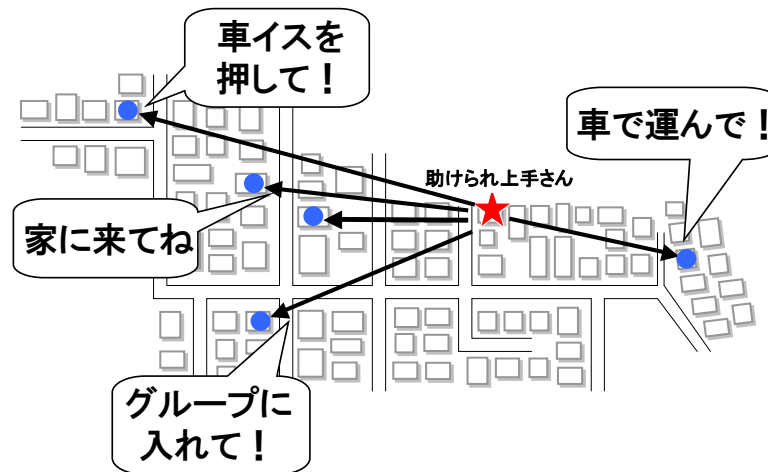
後方支援でも

特技がなくても

(11) 「人にやらせる」のも活動の一つだ

「手づくり」という言葉がよく使われるように、ボランティアは自分の体を使ってやるべきものと思われています。災害地へ出向いて土砂を取り除いたり廃物を整理したり、そういう自らの「手」による行為こそがボランティアなのだ。

しかし、「活動」にもいろいろあって、人に「指示」を下すことだって、それなりの価値があるはずですよ。指示する人がいればこそ、他の者は安心して行動することができるのですから。



● 「公民館を活用すれば、私1人で何でもできる」

〇子さんは、町が募集した「食事ボランティア」に応募したのですが、集まってきたのは彼女1人。それで何人分作るのかと聞くと、70食！これは1人では無理と、仲間探しを始めました。

たまたま公民館で「婦人学級生募集」のチラシ。これにも応募して、講座長も引き受ける。仲間に「顔を売って手なずけて」、さてこれから何をしようかというところで、「食事サービスしない?」。すでに〇子さんに「手なずけ」られているメンバー、早速「配食ボランティア・グループ」が生まれました。

一人暮らしの男性宅を訪れて、「殺風景だ」と感じた〇子さん、同じ公民館の菊作りグループに目を付けました。「一人暮らしの高齢者に菊を作ってくれない?」。これで高齢者たちが喜んでいと知って、菊作りグループも喜んだ。次は花瓶がほしい。今度は陶芸グループに協力を持ちかけました。というふうにして、公民館の趣味グループの協力を求めて、地域のハンディを抱えた人たちの願いに次々と応えているのです。彼女が私にこう言ったのが忘れられません。「公民館を活用すれば、

私1人で何でもできる」。〇子さんのおかげで、趣味グループのメンバーがボランティア活動に参加することができたのです。

●人に上手に助けてもらうのも、考えようによっては「活動」だ

人にやらせると言えば、自分が困った時に周りの人に進んで助けてもらうのも、一つの「活動」と言えるのです。前頁のマップを見てください。夫が車椅子に乗っている主婦が、これをやっていました。夫を通院などに連れ出す時は、自治会長さん宅に電話して「すみません、夫を病院まで運んでください」。「自分は夫の介護で忙しいので、みなさん、我が家へ遊びに来てください」。「夫がデイサービスに行っている間、趣味グループに私を加えてください」。車イスが側溝などに落ちて動けなくなると、「みなさあん！」とご近所中に聞こえるように叫ぶのです。

これはただ助けてもらっただけで、ボランティアではないではないかと言われるかもしれませんが、ではあなたはご近所で要介護者のいる家に入れるでしょうか。気にはなるけど、家族が引きこもっているので、入れないはずですよ。ところがこの奥さんは、家族の状態をオープンにして、積極的に周りの人たちに助けを求めているので、堂々と支援に入れるし、何をすればいいのかも指定してくれているので、簡単に助けることができます。

助け合いというものは、いくら助ける側がその気になっても、助けられる側が閉じこもっていては動きようがないのです。つまり助け合いというのは、双方が協力し合ってはじめて可能になるのです。となると、この奥さんのやっていることも立派な福祉活動だとも言えるのです。

(12)後方支援でも立派な活動だ

神戸の大震災のとき、相当数の人が現地へボランティアにやって来ました。その後地元へ戻ると、「ご苦労さん会」が待っていました。「この人が寝袋を持って神戸まで行った〇〇さんです。皆さん、拍手を！」パチパチパチ…

あ那时候、仕事の都合などで神戸までは行けなかったが、地元で仲間からカンパを募ったり、支援物資を集めて神戸へ送る活動をした人もたくさんいました。しかし、それらの人が冒頭のような「ご苦労さん会」に招かれたという話は聞きません

でした。活動というのは、「最前線」でやらねば価値が薄い——そんな考え方が広がってしまったのです。おかしいことです。

よく言うではありませんか。「カゴに乗る人、かつぐ人、そのまたわらじを作る人」と。ケボラでは後方支援もしっかり評価しています。

●「奥さんを快く送り出してくれて、大変感謝しています」

長崎県で活躍する、女性6人組のボランティアグループ（写真）。あるとき、リーダーがメンバーに提案しました。「私たちがこうして楽しく活動できるのも、夫が快く送り出してくれるからでしょ？だから、みんなでお礼に行かない？」。そうしよう



しようということで、メンバーそれぞれの家を全員で訪問し、「ご主人、この人（奥さん）を快く送り出してくれて、大変感謝しています」とお礼を言って回りました。時には夫全員を招待して、皆で手作りのごちそうを作ってあげたり、旅行に連れ出したりと、年に何度か「夫への感謝」イベントを企画しました。

このようにしてもらえば、夫だって悪い気はしません。だんだんと彼女たちのボランティア活動を手伝ってくれるようになりました。家庭菜園で作ったものをお互いにプレゼントし合ったり、囲碁を楽しんだり、夫同士の交流も芽生えました。夫の何気ない行為をいわば「後方支援ボランティア」と認めてあげたら、積極的に活動に踏み込むようになった—よくわかる気がします。

(13)あなたが見込まれたことが「特技」だ

サラリーマンがボランティア活動に踏み込まない理由の一つに、「これといった特技がない」ことが挙げられます。男性というのは、そういう「特技」というものにこだわる心情があるようなのです。

しかし考えてみれば、「これといった特技」を持った人なんて、そうざらにいるものではないことがわかります。ところで、「特技」とは何なのか。東京・東久留米市。新旧住民が入り混じる所ですが、そこで面白いことが起きていました。ある

共稼ぎ夫婦、今日は宅急便が来るというので、困ってしまった。現在のように夜の配達がない時代でした。夫婦で働いているので、昼間荷物を届けられても困る。その時、駅に行く途中に老夫婦が大きな家に住んでいるのを思い出した。「すみませんが、昼間に宅急便が来るのですが、預かっていただけませんか？」「ああ、いいですよ。どうせ暇だし玄関も広いから、どうぞ」。

これで助かった共稼ぎ夫婦は、つい、このことを他の共稼ぎ夫婦にも教えてしまいました。結局その老夫婦、十数軒の宅急便を預かってあげているそうです。ついでに子どもも預けて、夕方、荷物と一緒に受け取りに来る夫婦もあるとか。

この高齢の夫婦は、自分たちの特技（強み）が何であるか、気付いていなかったはず。周りがその「特技」を見つけて頼みに来ることで、はじめて気付いたわけ。ということは、自分の所に周りが何を頼みに来るかを見ていれば、それが特技だとわかるはずなのです。

● 囲碁負けボランティア！

品川区ボランティアセンターで事務ボランティアをしている加藤章さん（写真右）のところに、1人のボランティアが悩みを持ってきました。脳梗塞の後遺症でリハビリ後、家に戻った男性宅を訪問しているのだけど、こちらの働きかけにまったく反応しない。同じ男性の加藤さんなら、話ができるのではないかと、というわけです。



そこで加藤さん、その男性宅に出向いたのですが、やはり一言もしゃべらない。困った加藤さん、「奥さん、旦那さんは以前何かしていませんでした？」と聞いてみたら、囲碁を楽しんでいた、という。それなら、こっちもへボだけどなんとかできる。「やりますか？」と本人に確かめたら、やると言う。気楽な気持ちで始めたら、簡単に負けてしまった。

おかしいかと、今度は本気でやってみたら、また負け。今度は本気の本気だと、全力でかかってみたが、これも負け。さすがにガックリした。

とその時、相手の男性が突然叫んだ。「やったあ！」。退院して初めて発した言葉

がこれだった。病院でどういう扱いを受けたか知るよしもないのですが、大事なプライドがボロボロにされて、意気消沈してしまったのでしょう。それが加藤さんに3度も勝ったことで、ようやく自信を取り戻した、というわけです。加藤さんの特技は、なんと「囲碁が弱い」ことだったのです。

第2章

「ケボラ」の10の利点

1. ハレボラとケボラは相互補完的關係

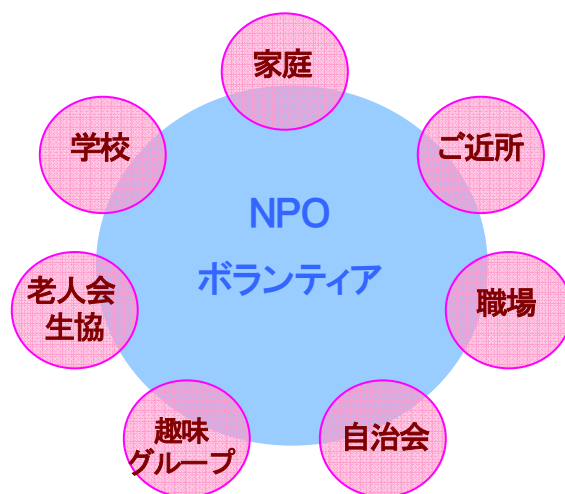
図をご覧ください。これは、1つの図の中にハレボラとケボラを一緒に、しかもそれぞれの位置と役割をマップにしてみたものです。

●ケボラが行われていれば、ハレボラの必要は生じない

ケボラの特徴は、「ボランティア」を自分の普段の日常の営みや本業から抜き出して特化したもの（ハレボラ）、ではなく、日常活動としてさりげなく取り組むものだということです。

その活動対象は、それぞれの組織・機関・企業と地域社会との接点に近付いてきます。図で言えば、大きな円と小さな円が重なった部分がケボラにあたります。そして、ハ

レボラはそうした組織・機関からは独立して、新たな組織として特定テーマに取り



組むものでしょう。

では、両者はどういう関係にあるのか。地域社会で日々、湧き起こっているさまざまな問題。それぞれの組織が、自分の足元に近付いてきた問題に本業の中で取り組めば、元々ハレボラの必要は生じません。ところが、この本業での取り組みが行われなければ、それにハレボラが取り組むより仕方ありません。というように、両者は相互補完的な関係にあると言えるかもしれません。

●NPOが、本来やるべき組織・機関に活動を「返していく」働きを

最近、これに新しい関係のあり方が生まれてきました。NPOが（ハレボラとして）既存の組織、例えば企業や公共機関と「手をつないで」問題にあたる、というケースが増えてきたのです。企業や公共機関も、本来自分たちで（本業ボランティアとして）取り組むべきだとは思いますが、そうする余裕がなくて実際には放置してきた。そこにNPOが介入してきて「一緒にやりましょう」と提案、これでスムーズに取り組める環境が生まれた、というわけです。

もっと興味深いのは、NPOと一緒に取り組みつつ、本来やるべき組織・機関に活動を「返していく」という動きも出てきている点です。それが本来のあり方であり、それによって社会はイキイキとしてくるのです。その反対に、既存の組織・機関が本来取り組むべき問題を放置したため、その問題が生じるたびに新しいボランティアグループやNPOを立ち上げなければならないというのは、やはり健全なあり方とは言えません。

2. ケボラで大きな「力」が発揮される

ケボラというのは、日常生活の中でさりげなく取り組むので、活動の「力」という点では、ハレボラにはかなわないようにみえます。ところがじつは、その反対なのです。

●本業の場で本業の腕を使うから、大きな力が

「日常生活の中で」とはいいますが、じつは「本業の中で」もその中に含まれるの

です。その本業の場に、活動のニーズが近づいてくるし、それに本業の場で関わるから、だれでもできる。その上、本業の腕を使って関わることになるので、個人的に余暇でボランティアをする以上に大きな力が発揮されるのです。

●「ニーズに合致する」というのも、見方によれば「力」

わざわざどこかへ出向いて活動するのではなく、日常生活の中で取り組むのなら誰でもできるし、相手も、わざわざどこかへ行くまでもなく、接点になった人に頼めばいいので、双方共に都合がいい。しかも当事者の方が「あなたがいい」と見込むのだから、ニーズにピッタリの活動がしやすい利点もあるのです。「ニーズに合致する」というのは、見方によればこれも「力」のうちに入るでしょう。

また、どんな人にも活動のチャンスがあるというのは、大変有利な条件と言えます。家族に対しても、また同じ悩める仲間に対してもボランティアができるし、後方支援でも心の活動でも、人にやらせてもいいとなれば、それこそ一億総ボランティアになり、その力を合わせれば大変なものになります。

3. やるべき人がやるべきことをすればいい

20ページの図はじつは、ケボラの力のすごさを示唆しているのです。というのは、それぞれが自分の生活や日常業務の場で、ちょっとだけ「脇に逸れれば」いいのですが、その「脇に逸れる」ということを、住民個々人だけでなく、企業をはじめ、さまざまな公共機関などが取り組むようになれば、彼らが発揮する力は、ほとんど無尽蔵とさえ言えるのです。

●警察署が徘徊高齢者探査ネットワークの主役に

警察官なら、非行少年の更生をはじめ青少年の健全育成に取り組む人もいるし、交番という場を根城に安心して暮らせる地域づくりに貢献している人もいます。

「足を洗いたい」という暴力団組員のために、刺青を消したり、足の指を手に移植する仲介もしています。徘徊高齢者の探査ネットワークにも加わるし、子どもたちの登下校に寄り添う警察官OBの活動も広がっています。

●ベビーシッター協会がシルバーシッターも担えば

社会にはたくさんの公共団体ができています。例えば財団とか社団法人だけでも膨大な数に上ります。それらの団体が、それぞれの本務を時代の要請に合わせることで、大変な力になるはずです。ベビーシッター協会がシルバーシッターも担うようになり、登山関連の協会がシニアの登山の支援にも取り組むようになっていきます。

●旅行代理店が介護人つき海外旅行プランを企画すれば

加えて、企業がその業種ごとに本業の腕を発揮すれば、どうなるか。旅行代理店が本格的な介護人つき海外旅行プランを企画すれば、寝たきりだって海外旅行ができるようになります。化粧品メーカーが、寝たきりや認知症の人向けの化粧教室を本業の合間に開いていますが、これで寝たきりの人が立ち上がったたり、おむつがはずれたり、認知症がよくなって施設から自宅へ帰ってしまったりと驚くべき治療効果が現れています。これが本業の腕の凄さです。

4. ケボラなら「できない」理由は見つからない

ハレボラの場合、本業が忙しくて「余暇」がない、自分自身問題を抱えているので当分は取り組めない、もう要介護状態になった、趣味活動が忙しい、町内会の役員で手いっぱいなど、「できない」理由はいろいろあります。しかしケボラというのは、あくまで自分の生活・本業の中で取り組むものですから、「できない」という人はいないはずなのです。

たとえば本業で忙しいと言っても、その本業の中で取り組めばいいのですから、できないということはありません。自分自身問題を抱えているというのなら、その自分の問題に取り組み、それを広げていけばいいのです。要介護状態になっても、その状態を生かせば、例えば介護研修のモデルになるなど、できることはあります。趣味で忙しいと言っても、「その趣味を半身不随の人に教えたら、リハビリになった」というように、趣味活動の一環で、しかもその趣味の腕を生かせばいいわけです。町内会活動で忙しいというのなら、例えば町内一斉清掃の日に、ついでに一人暮らし高齢者の庭の草取りをやってあげれば立派な活動になります。

このようにケボラにすれば、できない理由はすべてなくなってしまうのです。

5. 活動対象は相手の方から近づいてくる

いわゆるハレボラならば、ボランティアセンターへ行けば、老人ホーム訪問など適当なテーマが与えられるのですから、あとはこちらがそのどれを選ぶかだけが問題になるわけです。しかし老人ホームに行くことが自分にピッタリの活動なのかと考え始めると、やはりボランティアセンターで手っ取り早く活動テーマを見つけようというのは無理があります。

かといって、日々の生活の中でハレボラのテーマがあちこちに転がっているわけではありません。ところが、ケボラのテーマなら、労せずして見つかるはずですよ。なにしろテーマがあなたのもとに近づいてくるのですから。

例えばそれは「迷惑な客」として現れます。要するにあまり歓迎したくない相手のことです。しかしそれが自分に与えられた活動テーマであることは間違いありません。

● 「どうせ取っていくなら、きれいに切ってくれ」

静岡県三島市に、「仏の善さん」と呼ばれている人がいました。善さんは庭に黒竹を植えていたのですが、これを釣竿用に切って持っていく人が現れました。普通なら、垣根を密にするなどして取れないようにするところですが、善さんは、そこにのこぎりを置きました。「どうせ取っていくなら、きれいに切ってくれ」というわけです。また善さんは、柿の木も植えていたのですが、これも切っていく人がいる。そこで善さん、柿の木にハサミを吊るしました。「どうせなら、これできれいに切ってくれ！」。

さらに善さんは、休耕田に色とりどりの花を植えて仏壇に供えているのですが、その花も持っていく人がいる。ならばと彼は、もっとたくさん花を植え、「みんな、持っていきな！」。

だれかがそれを持っていくのは、欲しいからだ。ならばあげよう——これが「ボランティア」の出発点でしょう。

家庭サービスが優先	⇒	家庭サービスを他の家庭と協同で
もう年老いた。体も動かない	⇒	これからは心の活動を
町内会の役員をやらされた	⇒	その活動をさらに発展させたら？
本業が忙しい	⇒	本業の中で取り組めば？
これといった特技がない	⇒	頼まれたことが特技だ
趣味活動で忙しい	⇒	その趣味を生かせば？
身近にテーマがない	⇒	足元の気になることもテーマだ
自身問題を抱えている	⇒	その問題に仲間と取り組んだら？

●「苦情」も「特注」も新商品開発のヒントに

企業にもいろいろ「迷惑な客」が来ることは、12ページの「ケーキ屋さん」の事例でよくわかるでしょう。一般的に、企業に来る（企業から見ての）「迷惑な客」とは、次頁のような人たちです。

●そこから利益が得られるまで「時間差」がある。

いずれも企業からしたら、あまり歓迎したくない客ですが、これに取り組むことが「ケボラ」につながるのです。それだけでなく、これにていねいに対応している間に、そこから新商品のヒントが見つかったり、顧客開拓につながったりと、企業利益が得られることもあるのです。

最近「苦情は宝」とばかりに、苦情を徹底分析して新商品のヒントを見出そうと、本気で取り組む企業も出てきました。問題は、「迷惑な客」にきちんと対応すること、そこから企業利益が得られるまでに一定の「時間差」があることです。その間、辛抱できるかがカギとなるのです。

●「あの人はこういうことを望んでいるのかも…」

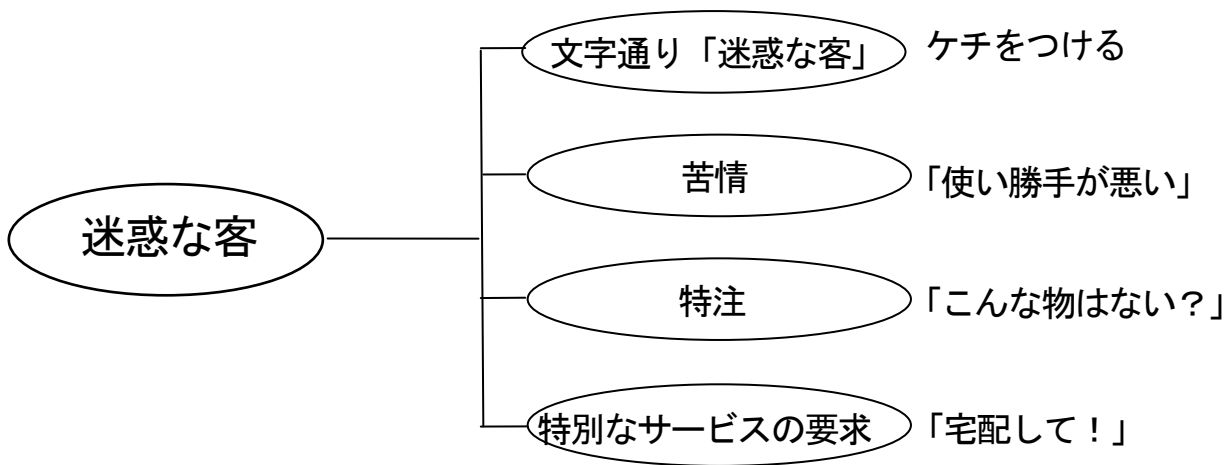
「迷惑な客」を自分の活動対象だと思っ直すのは、案外難しいものですが、ともかくもこちらに近づいてきているのですから、ちょっと努力すればできないことはあ

りません。もう一つ求められるのは、推測力と言いましょか。例えば…

埼玉県のスニア男性のA氏。「僕がやっていることもボランティアなのかね」と尋ねてきた。何をしているのかと聞くと…A氏の家を裏を、東武伊勢崎線が走っている。そして、家には八つのミニベランダがついている。そこでA氏は考えた。「(家の前を走る電車の) 乗客に、一瞬間でもいいから楽しんでもらえたら」と、そのミニベランダに、ド派手な花をプランターに植えて飾った。思い切り垂れ下がる花が八つも並んでいるのだから、乗客の目に入らないはずがない。

そのA氏、二つのビルのオーナーでもある。そのうち一つのビルの前が、ちょうど住民の散歩コースになっていることに気がついた。そこで氏は、ビルの前に塀を作り、プロの手で壁画を描いてもらったのである。「まちは楽しく歩かなくちゃね」。

これらの活動はすべて、相手から要望されたことではありません。氏が勝手に推測したものです。ここまでくると、まさに推測の芸術とでも言いたくなるほど、見事なセンスです。



●足元の気になるコト、ヒトがテーマだ！

栃木県の鬼怒川温泉旅館の女将たちを中心とした女性グループが、何かボランティア活動をしようと考えました。そこで、私に何をしたらいいのかと聞きに来たので、私は「すでに住民がいろいろボランティアをしているはずですから、それを探し出してみたらどうですか？そこにヒントが見つかるでしょう」とアドバイスしました。1年ほど経て出向いてみると、女将たちは手分けして、住民の隠れた活動を

徹底的に探し出していたのです。「ボランティア」と言うとわからなくなるので、「いい人探し」と名づけました。彼女たちが見つけた「いい人」たちの活動は、まさにケボラばかりでしたが、そのテーマの見つけ方に共通点があることに気づきました。

自分の足元の「気になること・人」に取り組んでいたのです。例えば孫の毎朝の登校時、気になるのは県道を渡るとき。そこで祖母はその県道まで出向いて、孫が横断するのを見届けることにしました。といっても、まさか孫が渡り終わったらさっさと帰宅する、というわけにはいきません。結局、子どもたちが全員渡り終わるまで見届けるという活動を、1年も続けてしまったのです。

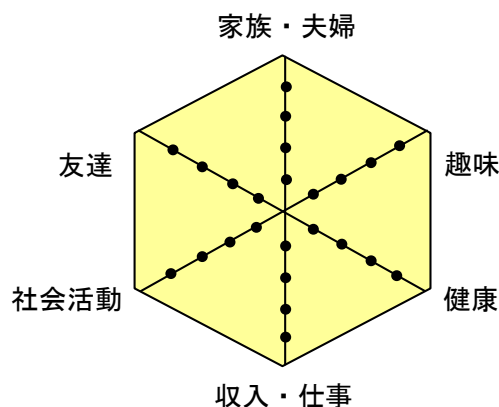
また、元大工の男性。いつも通るゴミ捨て場が汚いのが気にかかっていた。そこで手持ちの板の端切れでゴミステーションを作ってしまった。またある女性は、足元にできた「〇〇センター」の敷地が殺風景なのが気になって、その敷地に入り込んで花壇を作ってしまった。

考えてみれば、私たちの足元に「気になる」ことは、いつも5つや6つはあるのではないのでしょうか。一年間に数百にもものぼるはず。そのわずか1つに取り組むだけでもいいのです。

6. ボランティアは豊かな人生作りのいっかん

ある財団の補助金で「人間の豊かさ」について研究したことがあります。そこで全国の生涯学習講座などに出向いて、「豊かになるには、どんな条件が整えばいいと思いますか？」と聴衆に聞いてみました。何十回と同じことを聞いて、ある共通した項目が出てきました。

図をご覧ください。人間が豊かになるには、この6つの要件が整う必要があるということです。1番目が「働くこと」(仕事)、ここに「お金」も含まれています。2番目に「健康」。3番目に「趣味・学習」。4番目に「家庭・夫婦」。5番目が「友達」。そして6番目が「ボランティア」。不思議なことに、「ボランティア」を



することは、自分が豊かになるために重要な要件だと、誰もが言うのです。

ということは、「ボランティアをしなくてはならない」などと考える必要はなく、「豊かになりたい」と思えばいい、ということになります。豊かになるために、この6つの要件を統合的に充足させる努力をすればいいのです。

●「一石六鳥」作戦をめざせ

では、この6つをどのようにして効率よく充足させたらいいのか。コツがあるのです。まわりの人が「この人は豊かに生きている」と評価する人物を徹底的に分析してみたら、いずれも同じ手法を使っていることがわかりました。一石六鳥作戦です。まず、自分のいちばん得意な項目、またはまずこれに取り組みたいという項目を決めます。次に、それに取り組みつつ、「ついでに」他の項目も充足させてみようと考えるのです。

例えば、まず「趣味」を充実させようと考えたら、それを「夫婦」で一緒にやってみよう、その趣味グループで「友達」を作ってしまうおう、その趣味を生かして地域の役に立てることはないか、とも考える。趣味が発展して、収入につながらないかも考える—というふうに発展させていくのです。

そうやって取り組まれる「ボランティア」は、どちらかと言えば「ケボラ」型になるはずです。「ボランティア」を他の項目とは関係なく、独自に追求しようとすると、「ハレボラ」になっていきます。

ボランティアは自身が豊かになるための要件の1つであるというだけでなく、病気を抱えている人にとっては何らかの治療効果が、また犯罪者にとっては更生効果があることが証明されています。

●殺人犯に青少年健全育成をさせる国。受刑者の更生効果を期待。

アメリカという国は、こういう意味でボランティアをフルに活用しています。例えば刑務所では、殺人を犯した受刑者に、なんと青少年健全育成のボランティアをしてもらっている所があるそうです。反社会的な行動を繰り返して迷惑がられている不良の若者たちを刑務所に連れてきて、受刑者に指導させるのです。といっても「指導」などといった生易しいものではありません。およそ考えられる限りの悪態を

(NHK)



ついて、彼らを恐れおののかせるのです。地域ではいっばしの悪で通っていた青年たちが、恐怖で顔は真っ青。直立不動で、この悪夢の時間が早く去ってくれることを願っている風なのです。この情景がNHKテレビで放映されました。ABCの配信で、テーマは「17年目の出会い」。

この荒っぽい「指導」を受けた青年たちが、17年後に再会するのです。キャスターが「もう悪いことはやっていないかい」などと聞くと、「とんでもない！」悪いことをしてあんな場所に入れられるなんて、考えただけでも恐ろしくなったというのです。話は「あの時いちばん怖かったのはだれか」となり、皆が一致したのが、ある受刑者でした。すると、「それは俺のことか？」とその場に近づいてきたのが、その(元)受刑者でした(写真)。

彼は、終身刑だったのですが、その後出所して、今も地域でボランティア活動をしているそうです。その時の彼の発言が、字幕にあるとおりです。「子どもたちを救えるのなら、自分も救えるんじゃないかと」。なかなかいい言葉です。ボランティアが当人を救うということを言い換えたものだと思えます。更生効果があるということです。ボランティアは人格高潔な人がやるものだと思われているところがありますが、そうではないのです。当人の生き方を根底から変えるほどの力がボランティア活動自体にあるのなら、それを生かさない手はないのです。

7. グループに「入れてあげる」だけでいい

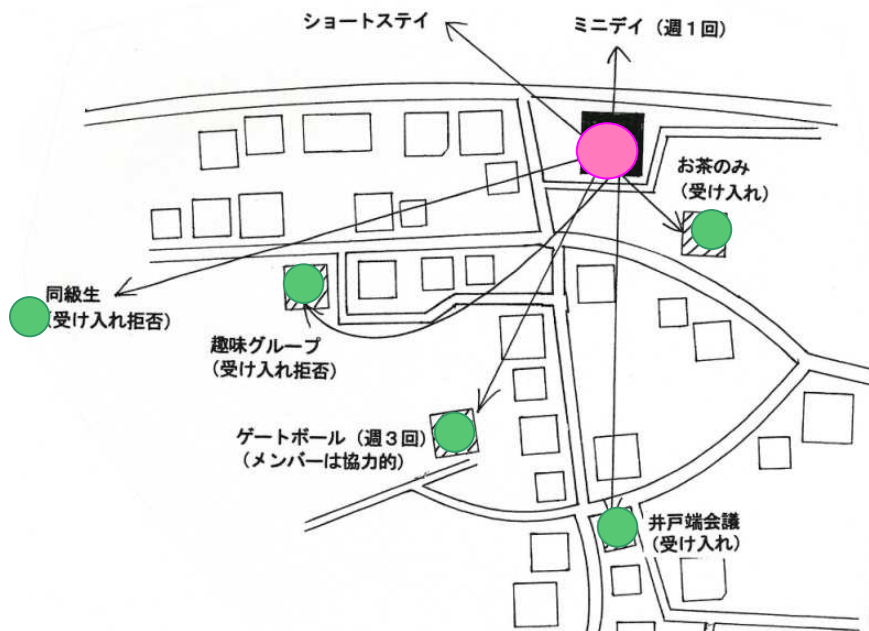
ケボラの特長・そして利点は、普段の日常生活や本業の中でテーマを探し、その営みの中で自然に取り組めばいいという点にあります。したがってこの利点を最大限に生かすことが大事になります。

例えば、趣味活動に取り組みながらできるケボラにはどんなものがあるでしょうか。一般的に言えば、成果物をプレゼントするとか、その技術を誰かに教えることなどがありますが、最も効果的なのは、要援護者や定年退職者を仲間を受け入れる

ことかもしれません。

下のマップは、ある認知症の高齢者が日々散歩しているのを辿っていったものです。すると、このようにいろいろなグループに「入れて！」と行っていることがわかりました。いちばん左端の家は彼女の同窓生ですが、「来ないで」と言われます。その右は趣味グループですが、ここも「来ないで」と断っています。真中のゲートボールのメンバーは、彼女を受け入れています。いちばん下と、右上方にサロン（井戸端会議）がありますが、いずれも彼女を受け入れています。

もし地域のすべてのグループが、認知症の彼女を仲間に受け入れてあげれば、これ以上ないぐらいの素晴らしい福祉活動をしたことになるのです。認知症になっても、地域のどんなグループも受け入れてくれる—これこそ本物の福祉社会と言うべきです。



8. キーワードは「ひらく」

ケボラは、普段の生活や本業活動の中からテーマを見つけ出そうとするので、「これがボランティアに当たる」と意識することが意外に難しいと言えます。また、身内（知り合い）間のお付き合いや交流ばかりなので、そこから「ボランティア」に発展させる「きっかけ」を見つけにくいという難点もあります。

そんなとき、この言葉を思い浮かべてみるといいでしょう—「ひらく」です。「ひらく」は「社会化する」と言い換えることもできます。ともすれば私的、個人的な営みとなるものを、社会的な行為に発展させること。例えば…



山形県米沢市の井上肇さん（写真）は、かつて椎間板ヘルニアの手術をしたのですが、予後が思わしくなく、別の医師にかかったら、だいぶ調子がよくなりました。患者の話もよく聞いてくれるし、触診だけで即断することもなく、必ず検査をしてから診断を下す——誠意のある医者だという印象を持ちました。

普通なら、菓子折りを持参しておしまいにするところですが、井上さんは、どうせお礼をするのなら「社会的に意義のある」方法はないものかと考えました。そうだ、あの先生を「宣伝」し、皆が先生を「活用」するようにしてみよう！そこで彼が始めたのが、この医師への紹介状を書くことです。「私は、かつて先生の患者だった井上と申しますが、私の知り合いが腰を痛めています。ぜひご診断を」と、紹介状在中と書いた封筒に入れ、保険証と一緒に受付に出すように指示したのです。何人かに紹介状を書いている間に、相手から紹介状を書いてと頼まれるようにもなりました。井上さんの狙い通り、この医師の評判が上がっていったということです。

彼は、娘さんのことでも同じ手を使いました。学校から部活支援の寄付依頼が来たので、どんな配分をするのか聞いたら、「それは当方で考えます」の返事。どうも体育会系の部活に優先配分されるらしいと知り、彼は「こちらで配分先を指名したい」と学校側に通告。毎月1万円を、彼が指名した美術部、科学部、ボランティア関連部などに公平に配分してもらっています。

家庭では冠婚葬祭も含めてさまざまな個人的行為がありますが、それを「社会的な行動」にする方法は、このようにあるのです。

9. 「あなたは、ケボラをやっていたんだよ」

ケボラの難点は、それをやっている当人も、また周りの人も、それが「ボランティア」であることに気付かないという点です。それはそれでいいのですが、「やっている！」という自覚や満足感を持ってないため、徐々にやる気を失ってしまうことがあります。また、ケボラをされている方も、「されている」という実感がなく、有難味がなく、しぜん、感謝の気持が失せてくるのも仕方ありません。

東京都小平市で、ユニークな人物を見つけました。前述のように、無意識でボランティアをしている人を見つけては、「あなたの行為をボランティアっていうんですよ。素晴らしいじゃありませんか！」と当人に言ってあげる—それを日々、やっているのです。

市のボランティア・アドバイザーをしている草（くさ）登美子さん（写真）。彼女の行きつけの八百屋さんの店頭にはイスが置いてあり、高齢客が井戸端会議ができるように配慮してある。「ここへ来るのが楽しみ」などと彼らが言っているのを聞きつけた草さん、店の人に「みなさん、喜んでいらっしゃるじゃありませんか。これも立派なボランティアよ」。



意外なホメ方をされた八百屋さん、「えっ、こんなことでもお役に立っているんですか」とこちらも大いに喜び、以降、今まで以上に高齢客へ細やかな配慮をしているといいます。

彼女のご近所には料理上手さんがいます。その成果物をしょっちゅう、近所の主婦や高齢者に「おすそわけ」しているようです。たまたま出会ったとき、この女性が「いつもボランティア活動をなさって、大変ですね。私なんかいつも家にいて、何もできないんですよ」などと言うので、草さんは「とんでもない、あなたこそ素晴らしいボランティアをしているじゃないですか！」と言いついたら、女性はびっくり。自分のやっていることが「ボランティア」に相当するなんて思ってもみなかったようです。

10. 「ボランティア」に権威づけは必要ない

考えてみれば、誰だって何らかの「ボランティア」らしきことは、しているはずなのです。自分のできることで地域や人のためになることをする一程度の意味にすぎなかったのが、ボランティアの研究者やプロの推進機関がいろいろな要件を貼り付け、他の「それらしき」行為と区分けし、一つの「価値」を作り出しました。差別化がなされた結果、「ボランティア」と認められた人は満足でしょうが、それにあてはまらない活動をしている大部分の人は、「自分はボランティアをしていない」と思い込み、今やっていることに自信を持たなくなっています。

つまり一方で「ボランティア」の裾野を広げたいと思いつつ、他方で「ボランティア」に厳しい要件を貼り付けて、裾野を広げさせまいとしている。矛盾しているのです。

私たちは、国民総ボランティアをめざしたいのか、一部の「権威ある」高度なボランティアが育てばいいのか。では、「高度な」とは何でしょう。ボランティアで、まずもって求められる「質」は、動機がよい、志（こころざし）が高い、組織としてよく整備されている—などよりも、「より効果的な」活動であるべきです。それなら、「ケボラ」はうってつけです。一見、たいしたエネルギーを注いでいるように見えなくても、そのことがもたらす社会的効果が大きい—それがケボラの特徴なのですから。しかも、国民総ボランティアをめざせる。もう「ボランティア」の権威づけはやめて、もっと気軽にこの言葉を使いたいものです。

第3章

「ケボラ」こそ「新しい公共」

ここまでは、ボランティアに、ハレボラとケボラがあること、そしてケボラを広

げればよいということを述べてきました。さて、今の社会を眺めてみると、そんな悠長なことを言っている場合ではなくなってきました。ボランティアをしようなどと呼びかける以前に、私たちはそれぞれ自分のやるべきことをやらなければ社会を維持していけない段階に至っているとも言えるのです。

●「生活保護水準以下」が三分の一

社会のあらゆる分野で、人々に困りごとが生じたとき、何らかの救済措置が講じられるような仕組みがあまり機能していないことが明らかになってきました。そのため、広義の福祉の対象者が日々、泉のごとく生まれ出て、その数が膨大なものになっているのです。

洋服の仕立てでは食えない (NHK)

「ワーキング・プア」というNHKテレビの番組が話題になったことがあります。今現に働いているのに、生活保護水準以下の生活を余儀なくされている人たちが、全国の勤労者の三分の一にのぼるという数字を、現場に追っていった企画です。



洋服の仕立て業を永年してきた男性は、今はほとんど仕立ての依頼が来ず、月々1、2万円程度の収入で生活しています。それがどんな生活になるのか、私たちの想像を超えていました。彼の奥さんは重症の認知症で入院していて、医療費が毎月6万円。年金はこの入院費で消えてしまうそうです。

タクシー運転手を首になった男性は、その後、正規社員の口がなく、3つのパートを毎日、掛け持ちしています。男手一つで2人の子どもを育てているのですが、この子らを大学へ進学させる資力がなく、もう一つパートの口を探そうと考えています。「働けども働けども…。カメラの前で男泣きする彼を、私は正視することができませんでした。

親から受け継いだイチゴ栽培で生計を立てる男性も登場しました。家族総出でイチゴ摘みに励む映像を見ると、いかに腰の痛む仕事であるかが分かります。一見、ちゃんと収入が見込めそうに見えますが、じつはこれで毎月が赤字だといいます。何がどうなっているのか。

●一度首になると、もうホームレス

三十代の若者も登場しました。どこかの会社を首になって以来、正規社員の口は彼にも巡ってこない。どんな仕事でもこなすと言っているのに、ハローワークに行っても、ビルの外壁の掃除といった仕事しかないのです。その口も、「住所不定」という理由で断られました。いかにも生真面目そうな青年に誰も救いの手を差し伸べようとしなない…。

離婚で母子家庭になった上、その母親に家を去られた男の子は、中学の頃から自分で働いて食べていかざるをえなくなりました。むろんこういう子を雇う会社はないでしょう。いま二十代になって「立派な」ホームレス生活です。毎朝、コンビニの前のゴミ箱を漁って、古本業者に売れるコミック誌を見つけ、「ああ、今日はこれで生きていける」と嬉しそうな顔をカメラに向けました。人生の途中でホームレスになったというのではなく、ホームレスという子どもが生まれ出ているのです。

●これは「政治」の問題ではない

これらのケースを見せられて、何人かの評論家がコメントをしていましたが、その中に解決へのヒントはほとんど含まれておらず、失望させられました。

「これは政治の問題だ」と誰もが言うかもしれませんが、どうもそうではなさそうな感じがするのです。むろん政治の役割もあるに決まっているのですが、それ以上に日本の社会に大きな問題が横たわっていると感じました。

「社会」というと、責任の所在がどこかわからなくなってしまうのですが、言い換えればそれは私でありあなたなのです。各自、社会のそれぞれの持ち場で、なんらかの社会的な責任を負い、それで収入を得ているはずです。その持ち場で果たしている「責任」の守備範囲や責任の自覚の仕方に、こういうワーキング・プアを生み出す素地があるのです。

例えばいちご栽培の農家。こういう人たちを救うために農協があるのではないのか。市役所にはこうした農家を支援する部署もあるはず。地元には青年会議所もあるでしょう。この家族に農業機械を販売した企業も、ただ高額な機械を売りつけるだけが業務なのか。それでも親父の仕事を受け継ごうと頑張る息子も、どこかの農業高校に所属していたはず。

こう考えると、彼らに何らかの救済の手を差し伸べてもいいはずだと思われる組織や機関は、いくらでも思い浮かぶのですが、そのいずれもが沈黙しているのです。

仕立て業でかろうじて生き延びている男性にしても、商店会や商工会議所はどうしているのか、銀行や信金は見てもぬフリをしているのか。パートで食いつないでいる男性に、職場や、元の職場（タクシー会社）は、「関係ない」のか。ホームレスの青年が毎日顔を出しているハローワークの窓口の職員に何かやるべきことはないのか。

わが家でこの番組を見ていて、やはり考え出すことは同じでした。「住所不定のため雇用してくれないとなれば、自分の家の住所を貸してあげたっていいではないか」。自分にはこの青年を救うことはできないと初めから突き放しているのです。

●そこまでの義務を負うことはない？

たしかに今の社会では、窓口を訪れる人たちに、自分の家の住所を貸してあげることをやっていたらきりがありません。そこまでの義務を負うことはない、というのが常識でしょう。

その「常識」のラインがだんだんと後退していった、本来救済の手を差し伸べるべき組織でさえそれを怠るようになってきているのです。それが商店会であり銀行や信金であり、JCであり、企業の組合であり、学校なのです。

筋論を言えば、社会のあらゆる組織・機関には、その構成員や、以前構成員であった者、あるいは構成員ではないが足元に近づいてきた人たちに、何か困りごとが生じたときに救いの手を差し伸べる義務があるのではないか。学校や企業なら、そこを卒業したり、退職したりした人に対しても、ある種の義務を自覚するような社会を作り出さねば、いくら政治を正しても問題はなくなるのです。

●福祉機能が内蔵されていない社会

社会全体に「福祉的な機能」がほとんど無いに等しいのです。こういう場合は専門の機関が関わるべきだという考え方があって、そちらへ任せればよいと思っています。たしかに障害を持つようになれば、障害者福祉はありますが、しかしそれは社会の最後のセーフガードであって、その前に、それぞれの持ち場で受け止め、で

きるかぎりの対策を講じる必要があるのです。そういう「もう一つの福祉機能」がないのです。「専門の福祉機関」ではなくて、社会のそれぞれの部署に本来備わべき福祉的な機能の事です。

●たまたま世話焼きさんであつたら

この「福祉的な機能」をすべての組織・機関が具備するようになるには、どうしたらいいのか。一つには、そこに世話焼きさんがいれば問題は解決するはずで、困った人がいたら気になってご飯がのどを通らないという資質を生まれつき備えた人です。ハローワークの職員がたまたま世話焼きさんであつたら、自宅に招いて、そこから働きに出させてしまうかもしれません。なぜそこまでやるのかと問われても「そうせずにはおられないから」と言うでしょう。

といつても、どこにも世話焼きさんがいるわけではありませんし、特に公的機関はむしろ「余計なことはしない」のが身の安全という考え方が浸透していますから、世話焼きさんだつて、その資質を活かしにくいのです。

今の状態では「助け合い社会」は絶対にやって来ません。すべての人がそれぞれの持ち場で、もう一步「前へ踏み込む」必要があるのです。「政治の問題」で済ませる時ではないのです。

●「新しい公共」、要はケボラをしようということ

最近、政府が「新しい公共」という言葉を使い始めました。この名前を冠した審議会や委員会がいくつか設けられて、「新しい公共」の推進策を議論しています。このほど新聞に「公共をリニューアル」というタイトルの意見広告が載りました。こう述べています。

…「『新しい公共』とは、教育や子育て、医療や福祉など、人を支える公共という役割を行政だけに任せるのではなく、市民やNPOなどが担っていこうという考え方。…日々の生活の中で、お互いのことを気遣い、もし役に立ちたいなという気持ち芽生えたら、自分にできることをする。そんな、小さくても、自ら一步を踏み出す姿勢が、『新しい公共』の基本となり、社会を変える力になります」 要するに本書で述べてきたような「ボランティア」ではないですか。

日常生活の中で、自分にできることをする、と
言えばどちらかと言えば「ケボラ」のことを言っ
ているようにも見えます。一方政府は、やはりN
POに関心があるようです。あるいはソーシャル
ビジネス。社会的に意義のあることをビジネスと
して進める。これを「社会事業法人」という名称で
位置付け、支援しようということのようです。



しかし今回の意見広告が言っているように、「公共」の意味には、各自が足元でた
またま接触した対象に関わるという意味が基本にあるはずで
す。これまで公共と言
えばお役所のことと考えてきましたが、じつはそうではなく、それぞれの人が分
に応じて公共の一端を担うのが本当のあり方であって、今回それを改めて「新しい公
共」と称したこと自体、日本人がなにかあればお役所に押しつける癖がいかに強か
ったかを物語ると言えます。

政府の動きに見られるように、結局はNPOの振興、あるいは企業に新しい観点
からのビジネスチャンス提案あたりで終息してしまう恐れもあります。たと
え政府の後押しで今後、NPO活動が盛んになり、企業がソーシャルビジネスに進
出したとしても、根本的な問題は変わりません。繰り返しになりますが、企業も行
政機関も含めて、それぞれの部署でたまたま接触した対象にきちんと対応するよ
うな社会にならない限り、本当の福祉社会が到来したとは言えないのです。

●あくまで本業や生活の接点で出会った対象への関わり

ここで改めてケボラの基本精神を振り返ってみましょう。アメリカでは今、「プ
ロボノ」という活動が広がっています。企業に勤務している人たちが、そこで発揮
している専門の腕を社会のために生かそうという運動です。その生かす対象がNP
Oだということです。コーディネート機関が活動志願者とNPOを結び付けるとい
うもので、従来のボランティアセンターのやり方と同じです。

前述の通り、資生堂が、認知症や寝たきりの人たちのためのお化粧品講座を開いて
います。受講した人の中には、おかげで認知症がよくなったとか、おむつが外れた
といった効果も出ています。一方で、顔にやけどやあざがある人たちのための相談コー

ナーも設けました。こういう人たちにこそお化粧の技術が生かされるべきで、資生堂はこういうニーズを窓口でキャッチしたのでしょう。しかもこうした貢献を通して、化粧技術の新しいヒントも得られたと担当者は言っていました。

「プロボノ」の仲介で従業員がNPOなどの支援をするのもいいのですが、あくまで自分の職場で接触した社会ニーズに本業がらみで関わっていく方が「ケボラ」らしいと言えますし、相手も助かります。

派遣切りに遭った社員の再就職をトヨタの組合が開始したというニュースに接して「これこそがケボラに近い」と思ったものです。第2章の「やるべき人がやるべきことを」—これにこだわりたいのです。

大手スーパーの店員向けボランティア講座の講師をした時に、以下のような活動テーマが出てきました。

①方言の強い客がいて理解できない。そこで地元の人を講師に方言講座をスーパーで開こう。

②聴覚障害のある客が来て困った。そこで彼等を講師に、お客さまも招待して店内で手話講座を。

③休みが皆別々なので、いつも一人ぼっち。そこで同じ休みの人のリストを作成しグループ化しよう。

④勤務が終わった後も開いているレストランを探すのに苦労している。そこでみんなで「9時以降も開いている安いレストランマップ」を作る。

老人ホームにボランティアに行くのもいいのですが、足元に顧客や仲間、それに自分自身、それぞれに福祉課題があるのですから、そこに取り組むのも大事なことです。これこそがケボラなのです。

●NHKのディレクターは何かできなかったのか？

「ワーキングプア」の企画が好評で、NHKはその後、またこの問題を取り上げました。そこであの青年が再登場したのです。子どものときに父は死に、母は失踪。はじめから仕事にありつけず、コンビニの店頭のゴミ箱から雑誌を見つけ出し、道路で販売する。一冊見つけたら「ああ、これで今日は食いつなげます」とテレビに笑顔を返していたのが印象的でした。

彼は、今は公園の掃除を役所から請け負っていました。先輩から誘われたといいます。ホームレスの人のための炊き出しに出向いて食事を配るボランティアをし、そのあと自分もその恩恵を受けていました。安定した収入を得、人のためにも尽力できるようになって、はじめて人間らしい自分に戻ったと、涙を流すシーンには胸を打たれました。

カメラと別れた彼は、また橋の下のダンボールに寝に帰りました。それをカメラが追っていきます。なにか割り切れないものを感じたのは私だけでしょうか。

第一回目でも彼は真っ先にカメラに登場しました。あ那时的の彼を、何百万という国民が見たはずです。彼と何らかの接点にいる人も数多くいたでしょう。「ああ、あの青年だ」とテレビに向かって叫んだに違いないのです。

なのに、彼は相変わらず、ホームレスのままです。だれもテレビを見ても反応しなかった。

NHKのディレクターも「接点のあった人」の一人でしょう。なにかできなかったのか。「いや、私たちは報道が仕事で、取材対象をいじってはいけないのだ」と言うでしょう

もしディレクターが個人的な伝手で彼の仕事を探し出したとします。その結果、彼の運命はどうなったのかを報道してくれたら、(それは報道の基本ルールからはずれたことになるのですが)、視聴者は救われた気持ちになったのではないのでしょうか。そして、なるほど、そうやって接点にある人が一步踏み出せばいいのだと悟るに違いないのです。

やっと銭湯に行ける境遇になったかと安堵したとたん、その銭湯からダンボールへ一直線、というシーンで、あつけにとられた視聴者も少なくなかったのではないのでしょうか。

●ケボラが日本人の体質にまでなった時、本物の福祉社会が

今、1つの可能性として、NHKのディレクターが何かできなかったのかという問いを出しましたが、残念ながら今の段階では「ないものねだり」でしょう。しかし、このケボラが日本人の体質にまでならないと、いくらボランティアやNPOの数が増えても、企業の社会貢献活動やソーシャルビジネスが盛んになったとしても、

これまでの社会とたいして変わらないでしょう。

マスコミはどうしてもハレボラの方に興味を持ってしまいます。ハレボラの方が「絵になる」のですから、仕方がありません。地域のボランティアセンターもハレボラ、オンリーで推進しています。もっとケボラを前面に押し出すような勢力が誕生することが期待されます。